

多様な時代のダンスの力 The Power of Dance in Education and Spiritual-Care

山梨大学 木村はるみ

1. 芸術・芸能教育としての舞踊：美的体験

2022年8月10日、鎌仙会能楽研修所で「むすびの会」20周年記念事業「祈りの表現」をテーマとした「人間国宝によるお話と実演・・・志田房子・比嘉聡・大蔵源次郎・(司会：波照間永子)」を参観する機会を得た。人間国宝の存在に触れる体験は素晴らしく、三人の人間国宝体験について語りたいところではあるが、ここでは本研究会に直接に関わる舞踊家の志田房子先生の琉球舞踊について取り上げてみたい。ダイレクトに身体に響く（流れ込む）美しさ（アンムート）についてであり、舞踊の美的体験の学習とは何かを考えたいからである。

ところで「むすびの会」は、学校現場で日本の伝統芸能を体験的に学ぶ機会を応援することを目的に実演家、学校現場教員、研究者らで2002年に設立された協会である。実演家の学校等への紹介、普及活動、新しい切り口での紹介手法や教材開発にも挑戦している。むすびの会 日本伝統芸能教育普及協会 (musubinokai.org) 山梨大学にも民俗芸能や日本舞踊の指導に何度か来ていただき、学生は山伏神楽やアイヌ舞踊、日本舞踊ならびに歩行や作法など専門的な動きと文化をからだから学習することができた。歌と太鼓に合わせて舞い踊る幸福なひと時であった。



上：山伏神楽（近藤洋子先生・中永真吾先生
2019）

山梨大学 大学会館多目的ホール



右：アイヌ舞踊（近藤洋子先生・中永真吾先生
2019）

山梨大学 大学会館多目的ホール



お辞儀（藤間加賀美先生 2019）
山梨大学 大学会館多目的ホール



日本舞踊（藤間加賀美先生 2019）
山梨大学 大学会館多目的ホール

2. 流れ出る美しさ

生理心理学者である F.J.J ボイテンディークは、『人間の姿勢と運動についての一般理論』中で運動美について述べているが、Eleganz（優美）・Grazie（見事）とともに Anmut（？）という美でこの大著を締めくくっている。（F.J.J.Buitendijk “Allgemeine Theorie der Menschlichen Haltung und Bewegung” 1956.p357）この内、「優美さ」はその動きの滑らかさや繊細さ、バランスなどがイメージできる。日常表現でもエレガントな所作はマナーや心得のある者の仕草に現れる。「見事」には技巧的に卓越した者の動きに見られる驚きや力強さ、絶妙なタイミング、安定感などではないだろうか、では「アンムート」とは何なのか。これは大学院時代からの私の課題であった。1980年当時の大学院の運動学の授業で金子明友先生がボイテンディークを紹介し、「木村さん、舞踊美ではなくて運動美の研究しなくっちゃ。」と言われたのを今でも覚えている。それから何十年も経って、2000年代のある日この言葉に出会った。それはスイスから来た女性司祭が日本文化について語った時であった。ドイツ語など聴いてもわからず通訳の日本語ばかりを聴いていた自分であったが、ふとこの部分だけドイツ語が耳に入って来た。「あっ、アンムート（!）だ。」その時の司祭の輝くような顔や両手を流れるように動かして語る様子を今でも覚えている。何を語っていたのか。それは京都・奈良で観た仏像の美を語っていた時の言葉であり所作であった。彼女は日本仏教の仏像に対面し、そこから流れ出るような美を感得したと話していたのである。

話を先の「むすびの会」の舞台にもどそう。人間国宝の志田房子（1937ー現在：琉球舞踊芸歴 82 年）の舞にはこの流れるような美が発露しており、観客を魅了していた。その日の夜にHさんに送ったショートメール：木村「志田房子先生の舞は、もう菩薩の域と思いました。最高のグリーンケアと思いました。素晴らしいですね。」Hさん「そうですね。だから私も 32 年間、お稽古を続けて、先生に会いに行っているのかも」木村：「人間のこころの傷にしみ込むお薬のようで、泣けて来ました。」

人間国宝とはどのような存在なのか、そもそも「国宝」とは何か。この言葉は日本仏教史の中でも比叡山延暦寺の開祖である最澄（伝教大師）が「山家学生式」の中で伝えている。

「国の宝とは何物（なにもの）ぞ、宝とは道心（どうしん）なり。道心ある人を名づけて国宝と為（な）す。故（ゆえ）に古人（こじん）言わく、徑寸十枚（けいすんじゅうまい）、是（こ）れ国宝にあらず、一隅（いちぐう）を照（てら）す、此（こ）れ

則（すなわ）ち国宝なりと。」部分 <https://www.tendai.or.jp/rekishi/index.03.html>

3. 医学教育の中での芸術教育・ダンス教育の再評価

「いのちの研究会」（2022.10.9 京都）で慶応大学名誉教授の加藤眞三先生はこれからの医学教育に必要なのは芸術だと語った。ロジカルなことはAIが人間以上にできる世の中が近未来的に来ると考えられ、これから医師に必要とされる資質は、感性やコミュニケーション力であることが、イェール大学の論文に出て来ており、ハーバード大学では授業にダンスが入って来ているという。しかし、実際にどのような活動をダンスとして医学教育に取り込んでいるのかは不明である。（機会があれば確認したいと思う）

さらに、脳神経科学的に、美を感じる部分と倫理を感じる部分が近いことがわかってきているという報告もあった。（参考第4回いのちの研究会シリーズセミナー「ケアとうたとアート」（基調講演 鎌田東二） 総合司会 上田紀行、パネリスト 島蘭進、加藤眞三、町田宗鳳 - YouTube）

4. 身心変容技法研究・・・教育学や他領域の中での舞踊への期待

教育学の話題として、人間形成と東洋思想を扱う論は2000年代に入ってから顕著になった。この分野の教育哲学者として西平直（京都大学名誉教授）がいる。（余談であるが、母上は故西平梅子先生であり、木村の先任の山梨大学教育学部の舞踊教育担当教員で日本教育大学協会舞踊研究会の初代メンバーであった。）それまで宗教学の話題であった仏教修行における身心変容技法を教育学の観点から再評価と議論を重ね多くの教育哲学の論文を発表している。日本の芸能論についても造詣が深く、世阿弥の稽古哲学を現代の教育に生かすなどで著名である。

西平直先生と出会ったのは「身心変容技法研究会」である。[身心変容技法研究会 \(coocan.jp\)](http://coocan.jp)は鎌田東二（京都大学名誉教授）を研究代表とし、科研Aを連続で獲得した新領域の形成であり、多領域の学者・研究者・芸術家・教育者・実践家などを従来の領域の枠を越えて集合させたインターディシプリナリーな総合研究であり、現在も若手や新領域の研究者を巻き込みながら発展的に続いている。（木村も舞踊学の立場から研究協力者として参加している。）この身心変容技法研究会の前段階に「モノ・感覚・価値研究会」<http://mono-gaku.la.coocan.jp/>があった。これは感覚を変える（メタノイア）への芸術的試みの研究と思われる。最近は新たに楽園学会 [楽園学会 \(square.site\)](http://square.site)が設立され、身心変容技法から社会変容のワザへと議論は具体性を持って継続している。

5. グリーフケア・スピリチュアルケアとしての舞踊

現代京都藝苑 2021 における鎮魂能舞舞踏「悲とアニマⅡ～いのちの帰趨」の作品分析を通して芸能行為について考察した。作品の映像は以下の URL から視聴できる。

<https://www.youtube.com/watch?v=WZV84PJLaaU>


発表のPPTを以下に添付するが、研究発表の実際は以下の動画記録を参照いただきたい。

<https://www.youtube.com/watch?v=SwRw4Ci1ZFQ> 現代京都藝苑 2021 シンポジウム④「グリーフケアと芸術」2022年1月9日 - YouTube



<p>現代京都藝苑2021 シンポジウム④ グリーンフェアと芸術</p> <p>「い・のりとあらはれの身心変容技法:脱魂型と招魂型 ~奉納鎮魂能舞舞踏『悲とアニマⅡ』にみる三体四元素~」</p> <p>山梨大学教育学研究科 准教授 舞踊学・体育哲学 木村はるみ</p>	<p style="text-align: center;">奉納鎮魂能舞舞踏 「悲とアニマⅡ ~いのちの帰趨」</p> <p>2021.11. 21 京都 建仁寺両足院 方丈の間 45分:三部構成(生界・死界・生死界) 作者:鎌田東二……実演者3名</p> <p>音・朗唱・唄: 鎌田東二 (宗教哲学者・詩人・神道ソングライター)</p> <p>能舞: 河村博重 (観世流能楽師)</p> <p>舞踏: 由良部正美 (舞踏家:(スペースALS-D主宰))</p>
--	---

<p style="text-align: center;">「い・のり」と「あらはれ」</p> <p style="text-align: center;">聴こえないモノを聴こえるように 見えないモノを見えるように</p> <p style="text-align: center;">悲しみの心は見えない、聴こえない</p>	<p style="text-align: center;">声・言葉・朗唱・うた</p> <p>言葉はどこからやって来るのか、 大切なことや重要なことを語る前の一瞬の沈黙</p> <p>思い → 言葉の発生 → 声(息→声帯) → 文字・絵画</p> <p>空間に顕現した思いは声として現実となる。 文字は語であり、象形である。 記憶の世界に言葉が音として刻印される。</p> <p>い・のり……「い」が「のり」</p> <p>鎌田東二のおもいが言の葉に乗ってやってくる。押し寄せてくる。 想いは重い、深い深い悲しみ。狂天働地の世界である。 西洋では、「グリーフ」という。Gが響く。 これは喉の奥の唸るような音である。</p>
--	---


<p style="text-align: center;">音・唄・朗唱(鎌田東二の世界)</p> <p>音響芸術 (アニマの呼び出し) 鎌田東二の三種の神器 巻貝のアニマ(法螺貝) 石のアニマ(石笛) 竹のアニマ(横笛) 金属のアニマ(鈴)</p> <p>言霊芸術 詩: 鎌田東二作「狂天働地」の世界</p>  <p>神道ソング(唄) 自作・自演 ギター(リズムとコード・背景)</p> <p>朗唱・語り・叫び(自作・自演)</p> <p>第1部 「みなさん天気は死にました」</p> <p>第2部 「あしはらのなかつくに1」 「あしはらのなかつくに2」</p> <p>第3部 「預言者」 「メコン」</p> <p>1. 「探し求めて生きて来た」 「犬も歩けば棒にあたる」</p> <p>2. 「神ながらたまちはえませ」 「夢にまでみた君ゆえに」</p> <p>3. 「君の名を呼べば」 「神」・「銀河鉄道の夜」</p>	<p style="text-align: center;">楽器の特徴</p> <p>管:気体的・風・響き</p> <p>法螺貝: 息を入れる 始まりと終わりを告げる</p> <p>石笛: 高音域・抑揚・フォルテ</p> <p>横笛: 中音域・柔らかさ・弱 (セメ音あり)</p> <p>鈴: 円形でのダイナミックな鈴振り・ 金属音</p> <p>弦:振動・地・循環リズム</p> <p>ギター 弾き語り</p> <p>唄の伴奏 メジャー・マイナー 明暗 速度・テンポ 循環リズム・連続性</p>
--	--

人間の体の変身・変容と舞人の世界

あらはれ……異界の存在者たちの現出
(あらはれ……あつばれ)

表現体 (能楽師:河村博重の世界) 運動体 (舞踏者:由良部正美の世界)

鬼体 女体(女神) 両性・無性の身体



7

能舞・カラダ・所作

能楽師は、祈禱師でもある。
折り目正しい能楽の所作の中で「降ろし」の術を使う。

「天下の御祈禱」が能楽の使命である。
「魔縁を退け、福祐を招く」

能楽師:河村博重の**カラダ**は**面**をつけ、**衣**を纏い、**鬼**になり**天女**になる。
採り物である**杖・数珠・扇**は神の依り代である。

日常では見えない世界の存在者と私たちが出あう。

8

舞踏・カラダ・運動

男でもない女でもない。
人間でもあり、人間でもない。
年齢もわからない。

宇宙に委ねられたカラダ。捧げもの。
神秘に触れた皮膚の発光のあたたかさが浮遊する。
「原初生命体」の舞踏。治療であり舞う薬。
こころの傷に流れ込む。

舞踏者:由良部正美は**ヌルヘア**の**頭部・顔**を**白**で塗り、**右に赤い衣**、**左から黒い衣**を重ね、**裸足**で舞う。**薄く開かれた目**ははるかな遠い世界を見つめている。**霊界の歩行**。**霊界に触れる手のひらは立ち上る霧のように微細で柔らかい。**

9

全体構成(時系列)第1部・第2部

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

10

第3部

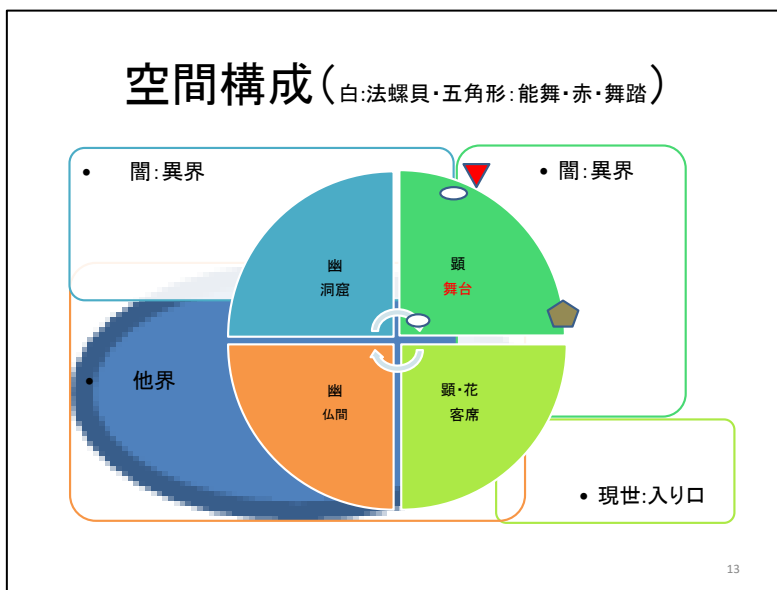
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32

11

第3部 終結部

33	34	35	36
37	38	39	40

12



舞 (外装)

能舞	舞踏
<p>第1部</p> <p>鬼面・黒紋付き袴・白足袋</p> <p>第3部 採り物</p> <p>長い杖を持って登場</p> <p>気合の声</p> <p>数珠での念</p> <p>第3部 変身</p> <p>「神」の曲から変身</p> <p>女面・白絹の千早・檜扇</p>	<p>第2部</p> <p>ヌルヘア・顔は白塗</p> <p>右肩赤・左黒の衣</p> <p>裸足</p>

14

動きの特徴

<p>能舞: 個体的・地・収縮</p> <p>能の特徴的な歩行・すり足・ 直線的な方向性(明確な到達) つま先小刻みな明確な半円形</p> <p>腕の固定・手の造形・ 手のひらは内転 方位の確立: 身体の構え・身体軸</p> <p>大地に根差した下半身の安定 Gravitation</p>	<p>舞踏: 液体的・水・拡散</p> <p>足の裏を巧に使う歩行 ミヤンダリング(曖昧性)・曲線</p> <p>腕の曲線・螺旋 手のひらの外転 空間トレイシングな流動的なムーヴ メント・フォーム・中心からの放射 全身の回転・螺旋</p> <p>上昇と下降にもメルティな所作 Levitation</p>
--	---

15

第1部(生界)

1 みなさん天気は死にました

「みなさん 天気は死にました」
と 高校三年生の田村君は 言った
その田村君は 生きているか？
五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物
林檎よ
緑は異なるもの味なもの

そのとおりだが
でもね
死んだ天気も 縁次第
そのようになって そのようにある
あるべくして ある
なるべくして なる

世界はそのようにうごいている
線はそのようにはたらいっている
1ミリ1センチたりとて恣意的ではない
成るべくして成る
在るべくして在る

ありおりはべりいませかり
青森カルシウムはどこ行った？

臼田基五郎は飛びのいた
大森から青森まで
その飛躍こそが猿楽芸能
天狗舞
マイトレーヤ

そは如是我聞
聴くべき耳を研いだ
研磨研耳
いかつこなく
いかしまくはひのごと
弘前に
花折れて立つ

やつかみみ
はしぬれど
ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った
恐山にて
津軽三味線の
音律たかあま
ぐひのみこと

だがされど
されど木島
みやこじま
いつまで封せど
ねこばばの
影落ち延びて
地に臥せり

やつがれは
しとど
ぬれて
大河の一滴まで
のみほした

ぬれおちど
ぶらそいど
れおなると
はれおから
ひとしづく
はれ ほれ
みれ おれ

行き場なし
溜り場なし
咲き場なし
馬場愛なし

そうだとしても
すべてをいれて
すべてをすてて
本日早々

みなさん 天気は 死にました。

①「探すために生きてきた」3分

探すために生きてきた 道を求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

12345678910 果てしない 12345678910 切りがない
12345678910 とめどない 12345678910 道がない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
路を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

12345678910 果てしない 12345678910 切りがない
12345678910 とめどない 12345678910 終わらない

②「犬も歩けば棒に当たる」3分

犬も歩けば 棒に当たる
人も歩けば 暴力に当たる
などでこの世は荒れ果てた
などでこの世に 雪が降る
水の行方を 追いかけて
霧と消えた 夜となる
祈りを凝らして 月を見る
たまふりむすびの 月影よ おけ
おけ おけ (以下 繰り返す)

嵐の嵐に人を捲く
呆れるほどに火と燃えた
すべてあの世の星めぐり
すべてあの世に託担き
君の面影追い求め
夢まぼろしの夜となる
人の情けに涙する
象括れても星の夢 おけ
おけ おけ

16

第2部(死界) 前半

「あしはらなかくに」1

悉よ
ひとしおの海に咲く
流れ花

かたはしの
ひらきのさとの
戻り星

ふりさけみれば
かなしけれ
狂天働地
藻葉
鱧

あらしほのしほのやほじのやしほじのしほのやほ
あひにます

空は乱れ裂け
地は働哭す

とこしなえに
とこなめに
とこずれた
ところてん

とまどいは
見えず

さても
コロロン
みやしろと
しずむ

あしなえの
あしびきの
あしたびの
あじろぎり

ひさかたは
悉よ
永遠の巡りのごぞの秋

かき抱いて
逝った
誰もいない海

もはや
せめたりず
おこたらず
こりもせず
ほころびの宵

狂天働地
泣け
啼け
哭け
とごとくに

嗚呼 あしはらなかくに！
あしはらの なかつ くに！

③「神ながらたまちはへませ」4分

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

岩陰より涙み出して来る 水を探して 夢を探して
向こう岸に渡る 向こう岸に渡る
夢を聞いて 夢よ聞くと 天晴れ天晴れはへ 天晴れ天晴れはへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

なげなしの夢が壊れて 行く当てもなく流離う
戻十方未采陽 戻十方未采陽
夢を聞いて 夢よ聞くと 天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

祈りの言葉は死に絶えても 朝日の中で廻り咲く
戻十方未采陽 戻十方未采陽
戻十方未采陽 戻十方未采陽
夢を聞いて 夢よ聞くと 天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ
天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

17

第2部(死界)後半

「あしはらなかくに」2

悉よ
修理固成
あなたが戒めた道を踏み行なう人としてなく
外れ人となって彷徨う
天涯孤浪の旅

打ち砕かれし心の井戸に
一滴の水もなく
世界は砂漠の海に呑み込まれ

<水と神とは同じこと 心の汚れを洗ひきる>

中山みきは中島みゆきと同じこと 心の汚れを歌い
取る

うましあしかびひごちのかみ
地のうごめき

あめのみなかぬしのかみ
天のひらかれ

中山みきは「天地日月」と言わず「地天日月」と言い
換えた
そのころは？

かけまくもあやにかしこし
身の文を測れ
心の多寡を図れ
魂の高を量れ

うましあしかびひごち
あめのみなかぬし
くにわかひこ
あめわかひこ

くにとこたち
あめとこたち

飛ぶ鳥のあすか
明日香ゆめみし
ちのみあらかと
あめのみあらか

つかへまつり
のぞみまつり
しろたへの

身ぐるみ剥いで
身狂いは 出で
味胡桃 遣い出
出口なしのあめつちをみる

そらはあおいろ
ひかりにみちて
すきとおりにきどおり

<あめづちとてちてけんじゃ！>

④「夢にまで見た君ゆえに」3分

夢にまで見た君ゆえに ひとつかみまでさくゆえに
祈りを込めて届けたい 心尽きるまで果たしたい 仰
ぎ見る空と

夢の果てまで君探し この世の果てまで君恋し
届かぬ思いを見届けて いのち尽きても届けなむ
落ちて往く空へ

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなり
にけり

夢の奥まで迷い来ぬ 風に吹かれてさ迷いぬ
どこまで行けども果てしない 祈りの果てまで身を投
げて 飛び惑う夢よ

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなり
にけり

18

第3部 生死界 前半

預言者

預言者故郷に容れられず
すべてのノアは嘆く

戦いの火ぶたは切られた
霜焼けの手を厭うことなく
天から突き出てくる槍を受けて
地上に下ろす

火傷と凍傷を繰り返して裏返る
背徳の将校たちよ

すべてに意味があり
すべてに忌みがある

呑み込めないものはない

だがしかし
生が死を孕み
史を開き
詩を詠う

歌え
滅びの歌
バビロンは燃えた
預言者が視たとおり

歌え
整りの歌
ナウシカは知った
腐海の底の底からのメッセージを

見よ
砂漠の遥か彼方に海がある
見えるか 海が

溜れた泉を覗き込んでいる無数の眼
絶望を滴らす眸
飛び込んでくるヒヤシンス

青紫のヒヤシンスを風信子とも飛信子とも書く今宵満月
信子は風に吹かれてそよぐのだ
信子は飛んで飛んで飛んで行くのだ

不知火の海までは遠い
でもしか し

遠くとも飛べる
見る前に飛べ
風が吹いてくるから

ブネウマの舟に乗って
流星がまたたくあいだ

不知火の海の底から天の御座に槍の手紙が届いた

⑤「君の名を呼べば」4分

ああ ああ ああ ああ ああ ああ
君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名
を呼べば
打たれて 雨(アーメン)

ああ ああ ああ ああ ああ ああ
君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名
を呼べば
どしゃぶり 雨(アーメン)

南無妙法蓮華経(4回) 南無阿彌陀仏(4回)
のうまくさまだば一だらんせんだんまかろしゃだそわたやう
んたらたかんまん
おんあぼきやべいろしゃのうまかほだだまにはんどまじんばら
はらばりたやうん
のうぼうあかしやきやらばやおんありきやまりほりそわか
オンアマリタイセイカラウン(3回) オンソランバタイエイソワカ
(3回)
南無神変大菩薩(3回) 南無大師遍照金剛(3回) 南無日蓮
大上人(3回)
オンマニベメフーム(4回) キリエ・エレイソウ(4回) アラー・ア
クバル(4回)
神ながらたまちはへませ(4回)
ギャーティ ギャーティ ハラギャーティ ハラソウギャーティ
ポウジーソワカ 般若心経

ああ ああ ああ ああ ああ ああ
君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名
を呼べば
どしゃぶり 愛(会い・合い)

19

第3部(生死界)後半

⑥「神」

この苦しみの中に神が在る この悲しみの中に神が居る
神は森に住んでいるけれど 人の心の森にも住んでいる

この激しさの中に神が在る この憤しの中に神が居る
神は海に住んでいるけれど 人の心の海にも住んでいる

開け天地 吹けよ山河 つながれ天地 結ばれよ山河

この痛みの中に 神が在る この静けさの中に神が居る
神は天に住んでいるけれど 人の心の天にも住んでいる

この喜びの中に神が在る この祭りの中に神が居る
神は祭りの中に現われるけれど 折る心の中にも現われる

開け天地 吹けよ山河 つながれ天地 結ばれよ山河

開け天地 吹けよ山河 つながれ天地 結ばれよ山河

⑦「銀河鉄道の夜」

この地球から見ると銀河は白い乳の流れに見えて夜空を彩る
その夜 ケンタウルスの祭りではくは不思議な夢を見た
銀河の夜汽車に乗って星の世界を旅する夢だった

あの空の果てまで ほくたち二人で まことのさいわいを 探しに行こう
カンパネラの星までほくは旅をする カンパネラの星からほくは飛んでゆく

この宇宙の中で地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く
その夜 銀河の渦の中でほくは孤独な星となる
いっしょに行こうと誓ったきみはどこにいるのか教えて 教えて

あの空の果てまで ほくたち二人で まことのさいわいを 探しにゆこう
カンパネラの星までほくは旅をする カンパネラの星から独りで飛んでゆく

あの空の果てまで ほくたちみんなで まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう

メコン

メコン

棚の上の骨壺を抱いて
夕焼けの散華の海に入る

人知れず葬りの蛾
矢板の上に意気消沈した雪だるまが
悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ

誰にも見られず

何人にも咎められず

靴下を履いたまま飛び込んだ

おまえの胸に

メコンよ

防ぎようもない空と

喘ぎ見るばかりの

おまえの喉元

ぬめりと流れてゆく舌先を

衝立は途絶えた

メコンよ

何というなつかしさの奥に

蜜蜂がつつき合って

互いを刺し殺す現場を

生まれたばかりの

二日月の生卵

割れぬまま呑み込んだ

おまえの度量

いくばかり

いかばかりかと

捨て石に訊く

死後の生存を

名ばかりの孤独に

唯名論者は黙く

明日を信じないくせに

明日を待ち望む偽善者よ

サントペテルブルグまで

日傘をさして

揺籃の扉

消え果てし秀妻

海鮮問屋の蛸と消ゆ

うつぶりの夜汽車で

さあ ひらいて

おまえのまたを

ちのはてまでつづく

あめのやちまた

だが ちまたには季節外れの雪が降って

いた

熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも

狂天働地の風上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても

あめつちをつなぐ母なる河として

あなたは 流れつづける

この世の果てまで

地の涯てまでも

20

詩の語り・朗唱・朗詠の特徴

声色・速度・長さ・強(フォルテの声投げ・・・宙に飛ばす魂)

第1部(序)

みなさん天気は死にました

「みなさーん、天気は死にました！」

第2部(破)

あしはらのなかつくに1

「あしはらのなかつくに～」

「神ながらたまちはえませ～」

あしはらのなかつくに2

「あめつちとてちてけんな～」

第3部(急)

預言者

「うた—————」

「みよ—————」

「飛んで行くのだ—————」

メコン

「この世の果てまでも～」

「地の果てまでも～」

21

詩・朗唱・叫・唄

詩の炎：燃え上がる言葉の炎：火

言葉の炎が時間を超越した存在を生じさせる

Hi no Michi o Weg durch die Feuer : Volker Harlan



作品の時間構成にみる序破急

	楽	詩	声	唄	舞
第1部 生界					
序					
第2部 死界					
破					
第3部 生死界					
急					

23

制作上演意図と概要（鎌田東二台本から）

- ① 14世紀から15世紀にかけて世阿弥が大成した「複式夢幻能」は、多く、「諸国一見の僧」が各地を遍歴し、**その地で遭遇した霊や痛み**に直面し、**鎮魂供養と成仏を祈る「天下の御祈禱」**であった。本「**能舞舞踏 悲とアニマⅡ ～いのちの帰趨～**」は能の体裁を借りつつ現代の魂の遍歴と死生観探究を表現するものである。
- ② 全体を「**序破急**」でまとめた。序は導入部、破は展開部、急は終結部である。世阿弥は『風姿花伝』「第三問答 条々」の中で「一切の事に**序破急**あれば申樂さるがくもこれ同じ」と述べ、『能作書(三道)』では「**序破急**の三体を五段に作りなして、さて詞ことばを集めて、曲ふしを付けて書運ぬるなり。(中略)序破急に五段あり。序一段、破三段、急一段なり」と記し、『習道書』には「能の**序破急**の事、脇わき能のうは序なり、二番・三番・四番は破にて、事を尽して、五番目は急にて果てて、遊樂成就の一会いちえなる」と書いている。中でも、「破」はさらに「破の序・破の破・破の急」の三段に分けられ、こうして、一日の演目を「五番立て」とする規準が確立した。また『花か鏡きょう』にも「**序破急**の事」という一章が設けられ、詳しく論及し、「しかれば、**序破急**の心得、大儀の申樂より初めて、酒盛り、または仮初かりそめの音曲の座敷までも、次第々々を心得べし」とまとめている。
- ③ 本作「**鎮魂能舞舞踏 悲とアニマ～いのちの帰趨**」においては、「諸国一見の僧」は、**第一部序「生界」**では、たび重なる自然災害やコロナ禍で苦しむ世界を目撃し、**第二部破「死界」**では、気候変動による自然災害やコロナ禍や戦乱を生み出す暗黒世界を目の当たりにし、**第三部急「生死界」**では、「悲」のこころを抱きつつも「アニマ(たましい)」とともに、いのちの根源と平安としての「草木国土悉皆成仏の世界」を求める旅を続ける。
- ④ 本作の中で、鎌田東二は、石笛・横笛・法螺貝・神楽鈴・ギターを用いて演奏し、ギター伴奏で歌う。

24

三体四元素

個体・・・求心力・・・地球の引力(重力)

招魂へ

液体・・・遠心力・・・宇宙の広がり(無重力)

脱魂へ

気体・・・密度・・・空間の浮上

異次元へ

歌舞音曲の四元素

地の舞・水の舞・火の舞・風の舞

25

<p style="text-align: center;">奉納・鎮魂・グリーフケア</p> <p>奉納という行為</p> <p>神仏へ捧げる・受け取っていただく(何を?)</p> <p>鎮魂の役割</p> <p>神霊を慰める・死者の心を鎮める(慰霊) (神楽はクジラ幕の中で行われる)</p> <p style="text-align: center;">死者への鎮魂が生者へのグリーフケアになる</p> <p>グリーフケアと芸術 死者を超えて悲痛に向かい合う力から芸と術で扉を開くワザ</p> <p style="text-align: right;">26</p>	<p style="text-align: center;">謝辞</p> <p style="text-align: center;">ご清聴ありがとうございました。</p> <p>作品の映像はYouTubeで観られます。</p> <p><small>奉納鎮魂能舞踏「悲とアニマへのちの帰趨」2021年11月21日 於: 達仁寺塔頭・岡足院方丈(本堂・本尊釈迦牟尼仏) 親世流能楽師 河村博重、舞踏家 由良部正美、音楽 鎌田東二 撮影: 木村はるみ - YouTube</small></p> <p><small>本作品の撮影をさせていただきました鎌田東二先生はじめ、現代京都芸術苑事務局長の秋丸知貴先生・皆さまに感謝申し上げます。これからもよろしく願っています。(木村はるみ)</small></p> <p style="text-align: right;">27</p>
---	--

実演と研究発表の映像記録からもわかるように、この研究では死者と生者をつなぐ芸能の位置について、能楽・舞踏・器楽演奏・朗唱行為に焦点を当てて論じた。また能楽師と舞踏者の質感の違いなど、舞台芸能としての全体のバランスを陰陽・四大元素の質的要素から考え、生者が詩・歌・舞・器楽演奏を通して喪失の悲しみを表現すると同時に目に見えぬ他界や冥界へ働きかける鎮魂儀礼的な行為でもあり、歌劇が悲しみを物語ると同時に、観客（死者たち）への鎮魂の歌舞が生者のグリーフケアになっていることに芸能の意味を探した。悲しみの舞による昇華でもあり、時間を超越した存在を生じさせる術でもある。他界・異界とつながる時空間の創出は生死を超えて悲嘆の心を埋め、ある日を再現し、語り継ぐ。記念碑的に継続され儀式や儀礼の舞や所作となっていくものもある。これは世阿弥の確立した複式夢幻能における幽玄世界の現出技法でもある。ワキに呼び出されたシテは、今は亡き死者の悔しさや悲しみの声を美しく謡い、舞いに舞う。

6. ことばと魂・・・舞踊における「魂の復権」

今春から月1回のペースで他領域の参加者のいる「ことばと魂」研究会に参加し、井筒俊彦の「意識と本質 精神的東洋を求めて」をみんなで読んだ。この本は80年代に流行り、わたしも大学院生のころに体育原論研究室の教員と読んだ記憶がある。40年ぶりくらいに再読してその晦渋な文体が哲学を遠ざけていることが気になった。哲学者の言葉には魂を感じない、ということかとも言える。個人を消して、「学者」となって業界用語あるいは説明言語を駆使して何か真理を語ろうとしているからかもしれない。アカデミックという慣習あるいは方法とも考えられるが、ニーチェは哲学が文献学になってしまっていると批判していた。彼の哲学的表現は論文ではなく詩編、あるいは箴言であった。わたしは卒論でニーチェを扱った。ニーチェのTanzenの比喻をテーマとした。自分がダンスをしていたからでもあるが、イサドラ・ダンカンをはじめ有名なモダン・ダンサーは「肉体の復権」とともに皆ニーチェを読んでいたからである。からだで詩を動く（生きる）こと、自分が詩になることを目指していたのかもしれない。いつのころからか「魂と舞踊」といった言葉が語られなくなったように思う。舞踊における「魂の復権」を目指したい。

7. 作品と実演・・・Notationの活用

作品を作れる力、技法、知識とダンスを実演できる能力は違う。世の有名な振付師は自分はおどらないが、ダンサーを生かした素晴らしい作品を創作している。ラバンセンターでのLabanotationの習得は実に楽しかった。楽譜をみてピアノを弾くのと同じ要領で、舞

踊譜を見て世界のたくさんのフォークダンスを踊った。見て記録する学習も行った。レパトリー・レッスンでは有名な振付師の現代作品のスコアを復刻する学習をビデオ映像ともに行っていた。コレオロジカルスタディーでは振付法を学んだ。3つの身体軸を基本として空間を把握し、自分を包む球体のトレイスから自由に空間に抽象絵画を描いていくような楽しさがあった。手で描く、足で描く、音楽に合わせてリズムに乗って自由なダンスが即興で生まれる。方向・高さ・長さ、強さ、部位、物の扱いなど、記号の習得はそのまま身体運動の習得であった。ここには「美しく」とか「素晴らしく」などはなく、ただひたすら楽しいのである。自分の体が自由になる喜び、空間感覚をつかむ安心がある。

今夏の集中講義では、**Your Move** と **Labanotation** の記号を使ってダンス学習を行ってみた。最終試験は自分の作品のスコア（4/4 で 16 小節）を描き、実演することとした。驚いたことに実に習得が早く、自分のスコアを真剣に書いていた。まるで振付師（コレオグラファー）を目指すダンス学校の学生のような実に専門的な雰囲気になった。時間があれば、自分の作品に相応しいと思われる友人に踊ってもらい、衣装や化粧も指示できるのだが、と話す、自分で踊らなくてもいいという事態に関心を持ったようであった。もちろん、自作自演や即興もありであるが、振付師とダンサーのいい出会いの可能性もあるはずだということを理解したらしい。（木村は **Labanotation** についてはラバン・センターにてアドバンスコースまで習得し、**Your Move** は「ステージ2」の資格を有していることを付記いたします。）

8. ありがとうございます

昨年末の全国大会では zoom での退職講演を企画していただき、ありがとうございます。講演内容をそのままではまとめきれず、そこで扱った内容に昨年の研究発表やこの春からの活動なども加味してショート・エッセイを書いてみました。とても退職記念論文とは言えないものですが、お時間のある時にでも気軽に読んでいただければ幸いです。

最近是非常勤講師をしながら、オンラインの研究会で充実しています。フィールドワークも 4 月出雲（ここでは島根大学の広兼志保先生とカフェ・タイムしました。）・5 月金沢（西田幾太郎記念哲学館）・7 月沖縄（久高島：大重祭参加）・10 月京都（比叡山延暦寺：ホリスティック医療研究フィールドワーク）・12 月奈良吉野（竹林院：楽園学会出席）を訪問し発見の連続でした。

共通教養科目ではこの 10 年の学びを生かして「身心変容技法研究から考える健康な社会とグリーンケア」と題した新授業を展開しました。仏教心理学者によるマインドフルネス・作曲家による音楽と身心変容・環境変容、オイリュトミストによるヘレンケラー体験、気功法から峨眉伸展功など他の近接領域のゲストティーチャーを招いて学生と一緒に学びながら楽しく授業を行い、最終回には身心変容技法研究会の研究代表である鎌田東二先生（京都大学名誉教授）に総論と趣旨説明、歌、詩の力、日本神話にみる芸能の起源についてご講演いただくことができました。人類史の中で様々な身心変容技法が創発される意味を考え、あらためて舞踊教育の重要性を感じました。

みなさまの益々のご発展をお祈りしています。

今後ともご指導よろしく願いいたします。

（木村はるみ）